

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Valency and the Japanese Verbal

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青山, 文啓, Aoyama, Fumihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003732

日本語の動詞とその結合価

青山 文啓 (桜美林大学大学院)

Valency and the Japanese Verbal

Fumihiko Aoyama (Graduate Division, J. F. Oberlin University)

要旨

単語はその用法しか記述対象にできない。英語の五文型は構成要素単位で動詞の記述を試みるが、ここでは単語を記述の中心にすえ、日本語の動詞を例に取りあげる。用言は語幹と語尾に分割され、語幹の結合価(文型)と、語尾の担う三種の従属関係(連体、連用、終止)とは相互に関連し、従属関係は結合価の増減にもかかわる。結合価の記述例として、ペアをなす動詞のうち他動詞/自動詞に焦点をあてる。ヲ格/ガ格に体言が共有される動詞ペアに着目すれば、体言が結合価の決定に大きくあずかることが分かる。結合価は(a)用言がいくつ体言を取り、(b)どのような体言が、(c)どのような助詞に仲介されるかを記述する。どの言語も体言は最大のメンバーを誇り、(b)の様な記述は望めない。すべての単語が一度は体言であり、固有名詞、外来語、複合名詞、専門用語、短縮語、略語、メタファーすべてを扱える記述モデルは虹の向こうにある。用言のなかに体言を囲いこむ対処法について検討する。

1. はじめに

小論では、結合価(文型)を想定しなければ説明できない、傍証をいくつか提示することを目的とする。前提として、日本語で単語が音形とアクセント型で外形を定義されるという基本的なことがらを確認する。言うまでもなく、印刷物としての辞書(dictionary)では単語をどのような見出し語形として登録するかを決めない限り、その見出し語に品詞情報さえ振ることはできない。

2. 結合価を想定すべきか？

ここでは結合価を想定しなければ説明のできない問題を二つ取りあげよう。例えば〈ココガイタイ〉と〈ココニイタイ〉とは助詞が異なるだけである。しかし、この助詞の違いをもとに私たちは頭のなかの辞書(mental lexicon)を引き、結合価を割り出し〈ココ／ガ／イタイ〉〈ココ／ニ／イ／タイ〉のようにべつべつの語形に分割する。イタイもイルも助詞ガを取りうるが、助詞ニを取るのはイルだけである。さらに結合価は、二つの文に現れるココの解釈にもおおきな差異を強制する。つまり、最初のココは身体部位だが、二つめの例では話し手の存在する空間を指す。こうした解釈の違いも、イタイとイルの語幹がそれぞれ有する結合価によりもたらされるものである。

当面、ある用言の漢字仮名表記を無視して、音形とアクセント型が活用を通じておなじであれば、同一の単語と考える——例えば「書く」「搔く」「欠く」はおなじ単語の異表記である可能性がある。しかし「欠く」にはペア「欠かす／欠ける」があり、前二者とは異なる。自他ペアがあるかないかは動詞の用法を分類する場合、有力な目安である。

本題にもどろう。結合価を想定すべき傍証としてつぎに昔話「一寸法師」をあげる。

- (1) むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんとがありました。
 【X】子どもがなかったものですから、【X】子どもがほしくて、ほしくて、
 明けても暮れても、このことばかり、【X】神さまにおねがいしておりました。
 た。[『日本むかしばなし集 1』坪田譲治 1975]

第一文には「おじいさんとおばあさん(と)」という並列された体言が現れるだけであり、第二文の三カ所のスロット【X】に入るのはこの体言でしかありえない。しかし「おじいさんとおばあさんニ 子どもガ ない」という結合価は「子ども」を【実子】と解釈させ、【おじいさんとおばあさんが 親ではない】という昔話特有のナンセンスな推論を呼び出す(例えば「公園ニ 子どもガ いる」と比較すると分かりやすい)。つまり用言に結合価を想定することは、無数にある体言と、その組み合わせから生まれる際限のない推論を、用言のもとに囲いこむための有効な方法である(さらに踏みこんで言えば、奥田靖雄の一連の仕事をそれに近づくための方法と見ても間違いとはいえないだろう：言語学研究会[編]1983)。

3. 用言から眺めた体言

どの言語でも体言はほかの品詞を圧倒しておおい。これは、無限の単語を有限個の類に収め、品詞表示を与えるだけではすまない問題である。『日本国語大辞典』(初版1976年 完結)は44万語の見出し語総数を誇るが、編集に深くかかわった松井栄一(1979)によれば見出し語を主要品詞別に見れば以下のようなになるという(以下の要約版から主要品詞だけを抜粋する：『図説日本語』1982)。

『日本国語大辞典』	見出し語総数	438,357
	名詞【73.19%】	320,824
	動詞【5.72%】	25,087
	形容詞【1.00%】	4,381
	形容動詞【1.09%】	4,760
	副詞【1.25%】	5,483

つまり、体言(名詞)はつぎつぎ造られるが、体言が造語されるたびにあらたに用言が造られることはない。辞典とよく対比される百科事典には、体言以外に収録される単語はなく、大量に排出された複合名詞の集積場所とも見られる。

一面で、複合名詞の形成は、既存の用言に対応させるための補填手段でもある。例えばコロナが世界に蔓延して、大学の授業も会議もオンラインが一般化した。〈教室〉から複合名詞〈バーチャル教室〉を造り、〈教室〉が〈行く〉を始めとする用言のあいだに築いた資産を有効利用するための方策だとは考えられないだろうか。〈教室で転ぶ〉ことはありそうだが、〈バーチャル教室で転ぶ〉ことはコミカルな推論しか生まないはずである。

逆方向の例もあげておきたい。〈教室に行く〉とはいえても〈先生に行く〉とはいえず〈先生のところに行く〉という(田窪1984)。これは用言〈行く〉が人を指す体言〈先生〉に対して、場所と理解されたければ形式名詞〈ところ〉に従属するよう強制する例ともいえる。類例に〈先生の話を話す／君のことが好きだ〉〈バラのにおいをかぐ〉などがあるが、強制的度合いは用言による。主要部〈ところ〉ではなく、従属部〈先生〉と用言〈行く〉との関係に記述の焦点を絞るほうが、実りある成果が得られそうである(宮島2005)。

4. テキストから単語へ

ところで、辞書を編むまえに見出し語形を確定しなければ、品詞情報は与えられない(水谷1951, 1952)。(2a)は一語だが(2b)が二語であることは、(2c)とこれらのアクセント型まで比較すれば納得がいくところである。

(2a)【とても】大きな男だった。燃えるような緑の目をしていた。(『TVピープル』村上春樹1993)

(2b)エスパニャと争い、イタリアを狙うヴァロア朝のフランス王【とても】同様であった。(『略奪の海カリブ』増田義郎1989)

(2c)先生は気長に治すことが大事ですと笑っているが、彼【とて】治療に自信があるようには見えない。(『マリコ／マリキータ』池澤夏樹 1994)

もう一つ類似の例をあげよう。(.....新興勢力である HIS が【大手】に価格競争を挑み台頭した)では〈HIS ガ 大手ニ 価格競争ヲ 挑む〉という三つの体言を取る(この例文はつぎの論考による:藤原 2016)。この場合の〈大手〉を〈大手企業／大手航空会社〉の略と理解し、助詞ニは用言〈挑む〉の必須とする体言を仲介すると、解釈する非母語話者はかなり読める人だろう。しかし〈新型コロナの感染が再拡大してきましたが、【大手】を振ってマスクを外せる日がやってくるのでしょうか? :『東京新聞』朝刊 31JUL2022〉では「おおで」であって先の「お]おて」とはべつの単語である(閉じのブラケットでアクセント核を示した)。しかし〈大手を振って中小に入る〉ではどちらの単語にも対応する。

ついでに助詞ニのむずかしさをべつの観点から二つ指摘しておきたい。まず奥田(1956)のあげる以下の二例を引用しよう(表記の一部を漢字に改めた):

(3a) 親切に感謝する

(3b) 親切に世話する

つまり述語〈感謝する〉は必須の体言として〈親切〉を要求するが、〈世話する〉にとつて〈親切に〉は副詞としてしか解釈されない(接続助詞ノニに関しても同様の指摘が可能である:青山 2013)。助詞ニが体言を必須とするか否かは個々の用言が決める専権事項である。もう一つ、三つの助詞ヲ、ガ、ニのうち、ニにおおきな負荷がかかることを見るために架空の箱根駅伝から例文をあげよう:

(4a) 東洋が青山学院に勝つ

(4b) 東洋に青山学院に勝ってほしい

〈ほしい〉が助動詞(補助用言)として使われれば〈東洋が〉を〈東洋に〉と助詞を入れ換え、自身の結合価に納めこの語順を維持するほかない。類例については次節でもふれる。

5. 自他ペアと“能格”

ここではカケ]ル/カカ]ルのように他動詞/自動詞の順に表示し、/kakéru/と/kakáru/を単純にペアと呼ぶ。しかし、ある動詞が「他動詞」か「自動詞」かは、その動詞がどのような助詞を介して体言を取るかどうかにかかっている、語形の問題とはいえない。このように、動詞を含む用言がどのような助詞を介して、どのような体言をいくつ取るかを記述目標に置く立場、あるいはそのような観点からなされた記述結果を「結合価」と呼ぶ。言い換えれば、自他の区別はもっとも原初的な結合価への視点と見ていいだろう。

具体例があると話が進めやすい。ヲ格にもガ格にも「時間をカケル・時間がカカル」でおなじ体言が立つが、「眼鏡をカケル・?眼鏡がカカル」「?霏をカケル・霏がカカル」のように体言をおなじくしないペアはめずらしくない。体言が共通する場合を自他ペアと呼ぶことには問題はない(英語圏では70年代前後に有力な研究者が、共有される体言を“能格”と呼んだが最近この用語法はほとんど顧みられることはない:Lyons 1968, Halliday 1970;青山 1983はこの用語法にならったものである)。しかし共有される体言を欠いたペアにまで、この用語を拡張することは混乱を増すばかりだろう。

この点を念頭においたうえで、それぞれの動詞をハイフンで語幹と語尾に分離し(5a)(5b)に示す。ハイフンの左側が語幹で、右側が語尾である。(5a)(5b)のように二つの語幹に共有される/kak/を語根と呼び、それぞれの語幹から共有部分を抜き去ったあとに‘é/ár’という形態ペアが残る。この組み合わせから他動か自動かが判別できるとされてきた。

(5a) /kaké-ru/

(6a) /sazuké-ru/

(5b) /kakár-u/

(6b) /sazukár-u/

しかし、「子どもをサズケル・子どもをサズカル」は(6a)(6b)に示すように、おなじ形態ペアでありながら両者ともヲ格体言を取る他動詞である。つまり形態情報より結合価が優先されなければならないことになる。

6. 結合価：単文と複文を区別するために

最初に単純な定義から出発しよう。一つの用言とそれが要求する一つ以上の体言からなる文を「単文」と呼ぶ。これに対して、二つ以上の用言とそれぞれが要求する一つ以上の体言からなる文を「複文」と呼ぶ(そして二つの用言は従属か、並列かの関係に立つ)。複文では、複数の用言が体言を共有する場合がある。このように考えたとしても、単文と複文のあいだに一線を引くのは、なかなかむずかしい。

そのむずしさは用言が活用することに由来する。例えば「一体に監察医の鑑定は、死後の時間をなるべく内輪に見がちだということだ」(『黒い手帖』松本清張、中公文庫 1974)では「見る」の連用形が命題を形成するが、主語の「監察医の鑑定」はこの動詞にも文末に現われる助動詞ダにも従属する。例えば、ある単語が用言であるか否かは結合価と活用という二つの性質によって支えられているが、日本語では活用が用言の結合価を変容させて助詞や助動詞への道を歩ませる。実際、私たちがある文を単文と認定するか、複文と認定するかは結合価によって支えられる命題の数が決め手になる。大切なことは、結合価とはこの“命題”を単語の連鎖として捉えたものと読み換えられることである。問題点をすべてリストするには程遠いが、これまで思いついた単文と複文との境界例を以下にあげる。それぞれ(7)は動詞-助動詞/動詞-動詞(つまり複文)、(8)は複合動詞/動詞-動詞、(9)は複合助詞/動詞-動詞、(10)(11)(12)は註釈句/動詞(形容詞)-動詞の境界例である。

■簡単に解説を加える。日本語の文法は動詞と助動詞(補助動詞)の一線をあいまいなままにしてきた。(7a)のクレルは助動詞と考えるしかない。この場合の〈紙に〉をクレルの直前に移動することはできないからだ。しかし〈私に〉は(7a)(7b)両様の解釈を許す。(7b)のように〈私の体に〉という解釈と、あくまでも受益者という(7c)の解釈である。

(7a) [彼は[[紙に地図をかいて]くれ]た](『深夜特急 2』沢木耕太郎 1994)

(7b) [彼は[[私に地図をかいて]くれ]た]

(7c) [彼は[私に[地図をかいて]くれ]た]

(7d) [彼は[[紙に地図をかいて]私に]くれ]た。

しかし(7c)のクレルは(7d)のように〈私に〉を移動させられるため、はっきりと動詞は二つあることになり(7c)(7d)はともに複文である。つまり語幹の持つ結合価情報は命題の認定に不可欠である。

■複合動詞のなかにはそれぞれが述語として、目的語を共用しうる場合がある。べつべつに自立すれば、当然アクセント型は単一語のそれからは変更される(cf. 長嶋 1976)。

(8a) ラスコリニコフは斧で老婆をなぐり殺した。

(8b) ラスコリニコフは老婆を斧でなぐり殺した。

(8c) ラスコリニコフは斧でなぐり老婆を殺した。

(8d) ラスコリニコフは老婆をなぐり斧で殺した。

最後の(8d)はそのほかの例文が共有する同義性からは遠く離れてしまう。複合動詞は一語であり複文とは違って、時間的な前後関係を表示できないからである。

■ニョッテとニョルトにはいろいろな漢字の書き分けが考えられるが、主語を取り得る(9c)(9e)だけが動詞である。そのほかは複合助詞だが受動と呼応するのは(9b)だけである。

(9a) 喫茶店によって、コーヒーの味はまちまちだ。(青山 2000)

(9b) 消息筋によって、この情報は伝えられた。

(9c) 【私は】喫茶店によって、トルコで地震が起きたことを知った。

(9d) 消息筋によると、地震は午前一時ごろ起こった。

(9e) 【私が】喫茶店によると、テレビはちょうどそのニュースを報じていた。

■ 註釈句(10a)が特異なところは、主語は話し手以外に考えられないのに、それが明示できないところである。

(10a) はっきりいって、ぼくは大学の将来が不安だ。(cf. 杉戸 1983)

(10b) 【彼女に】はっきりいって、自分の誠意を示せよ！

形容詞からつくられる註釈句もおなじく主語は表面には現れない。

(11a) 悪いけど、そろそろ行かなくっちゃ。

(11b) 【天気は】悪いけど、そろそろ行かなくっちゃ。

(12) くどいようだけれど、あたしは全く時間には遅れていなかったのだ。(『星影のステラ』林真理子 1986)

■ つぎの(13)は見逃されやすい表現型だが、問題の句〈私を相手に(して)〉は、どちらの場合も独自の主語を取らない(cf. 村木 1983, 1991, 3部2章; 寺村 1983; さらに、村木ほか 1984)。両方とも単文内部の問題と捉えるべきである。

(13a) その男は私を相手にして冗談ばかり言っていた。

(13b) その男は私を相手に冗談ばかり言っていた。

7. まとめ

結合価は用言を中心に体言の連鎖を見たものであり、命題を単語の連鎖として見なすことに近似する。つまり複文から単文を区別して命題を取り出すには結合価を想定する以外にない。小論では結合価を想定しなければ説明のできない用例を列挙したが、先行研究を咀嚼し改訂の機会があればもう少し読みやすいかたちに整理できればと思う。

謝 辞

本研究の一部は、国立国語研究所のプロジェクト「学習者辞書用語彙資源の構築」による。小論をまとめるにあたり、いろいろなかたにお世話になった。現状は未完成なままでありここに名前をあげるのはもうすこし論述を整理してからにしたい。

文 献

- 青山文啓(1986) 体言と用言の結ぶ二つの関係：能格性と対称性、『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』7 (情報処理振興事業協会)
- 青山文啓(1987) 料理の文章における提題化の役割、『計量国語学と日本語処理』水谷静夫教授還暦記念会[編], 秋山書店
- 青山文啓(1998) 二重主語構文と辞書、『言語』27(3)
- 青山文啓(2000) 活用と統語—日本語とスペイン語との比較から、『日本語と外国語との対照研究VI：日本語とスペイン語(3)』くろしお出版
- 青山文啓(2000) 統語論—単語の二重分節を中心として、『一橋論叢』124(4).
- 青山文啓(2004a) ことばの研究と辞書に記載される情報、『桜美林論叢』31: 37-45.
- 青山文啓(2004b) 日本語の正書法へのささやかな願い、『日本言語政策学会会報』4.
- 青山文啓(2013) 二つの四階層モデル—『文型』と『構造』のための読書ノート、『基本文型の研究』林四郎, 明治図書 1960, 復刊: ひつじ書房
- 青山文啓(2016) ハルキのレトリック, ルービンのツボ, 『ことばと文字』6
- 青山文啓(2019) 鈴木孝夫とその言語圏, 『ことばと文字』11

- 青山文啓(2020) 『雪国』冒頭部の翻訳をめぐって—中島文雄『日本語の構造』を機縁として (1987年), 『ことばと文字』13
- 奥田靖雄(1956) ことばの組み立て, 『講座日本語I: 民族とことば』大島義夫[編], 大月書店
- 亀井孝/河野六郎/千野栄一[編](1996) 『言語学大辞典 6: 術語編』三省堂
- 言語学研究会[編]1983 『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 情報処理振興事業協会(1990) 『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(Basic Adjectives)』同技術センター
- 須賀一好/早津恵美子[編](1995) 『動詞の自他』ひつじ書房
- 杉戸清樹(1983) 待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点, 『日本語学』2(7)
- 田窪行則(1984) 現代日本語の「場所」を表す名詞類について, 『日本語・日本文化』12
- 寺村秀夫(1983) 「付帯状況」表現の成立の条件—XをYに……する—という表現をめぐって, 『日本語学』2(10): 38-46.
- 長嶋善郎(1976)複合動詞の構造, 『日本語講座 4: 日本語の語彙と表現』鈴木孝夫[編], 大修館書店, 再収: 須賀/早津[編](1995)
- 橋本三奈子/青山文啓(1992) 形容詞の三つの用法: 終止, 連体, 連用, 『計量国語学』18
- 林大/宮島達夫/野村雅昭/江川清/中野洋/真田信治/佐竹秀雄[編](1982) 『図説日本語』角川書店
- 藤原未雪(2016) 中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの困難点, 『日本語/日本語教育研究』7
- 水谷静夫(1951) 形容動詞辨, 『国語と国文学』28(5); 『日本の言語学 4: 文法II』服部四郎ほか[編], 大修館書店 1979.
- 水谷静夫(1952) 形容動詞と謂ふもの, 『国文学 解釈と鑑賞』17(12)
- 宮島達夫(1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』(国語研報告#43)秀英出版
- 宮島達夫(1996) カテゴリー的多義性, 『日本語文法の諸問題—高橋太郎先生古希記念論文集』鈴木泰/角田太作[編], ひつじ書房
- 宮島達夫(2005) 連語論の位置づけ 『国文学解釈と鑑賞』70(7)
- 村木新次郎(1983) 「地図をたよりに, 人をたずねる」という言いかた, 『副用語の研究』渡辺実[編], 明治書院
- 村木新次郎/青山文啓/六条範俊/村田賢一(1984) 辞書における格情報の記述, 『情報処理学会自然言語処理研究会資料』46-3
- 村木新次郎(1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- Halliday, M. A. K. (1970) Language structure and language function. In: *New Horizons in Linguistics* ed. by John Lyons, London: Penguin Books. pp.140-165. ([『現代の言語学(上)』田中春美ほか[訳], 大修館書店, 1973)
- Lyons, J (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. ([『理論言語学』國廣哲弥ほか[訳], 大修館書店, 1973)